

訳注『研志堂詩鈔』選(二)

塩見邦彦

(鳥取大学名誉教授・鳥根大学元教授)

摘要

正牆適處は鳥取城下で文政元年(一八一八)に生をうけ、明治八年(一八七五)に亡くなった武士である。と同時に漢詩人として活躍した人物であり、この時代において傑出した詩人でもある。ここに数回にわたって、彼の詩集、『研志堂詩鈔』の選訳及び注釈を試みる。彼は詩人の心と画人の心とをもつて、自然を見たのであつて、結果としてそれが漢詩という世界に結実した。そのために、唐詩・宋詩の作風に学んだことを、実証的に説明する。

キーワード：正牆適處 研志堂詩鈔 幕末 明治 鳥取 漢詩

題歸漁圖 歸漁圖に題す

釣得溪魚晚返家	一竿擔影夕陽斜	平生未識膏梁味	幾椀村醪任婦餘
溪魚を釣り得て 晩に家に返る	一竿の担影 夕陽斜めなり	平生 いまだ識らず 膏梁の味	幾椀の村醪 婦の餘(おぎの)るに任す

【詩題】 歸漁図に題して

【大意】 溪魚を釣り夕方に帰る。竿を担ぐ人物の背景は夕暮れ時。常

日頃の生活では美食の味は知らないが、幾椀かの濁り酒を妻につけてかわせるのだ。

【語釈】 ○釣得―「得」は動詞の後に付き可能や完成を表す。○膏梁―肥えた肉と美味な梁(あわ)。おいしい食べ物のこと。○村醪―村でできる濁り酒。○除―つけて買うこと。

雨景圖 雨景図

滿溪風雨欲昏黃 滿溪の風雨 昏黄ならんとす

四面坐看雲脚忙 四面 坐(そぞ)ろに看る 雲脚忙しきを
俄爾峰巒無舊態 俄爾として 峰巒に旧態なし
半簾荷氣送新涼 半簾の荷氣 新涼を送る

【詩題】 雨景の図に

【大意】 谷川を満たす風雨の中、いま正に黄昏になろうとしている。ただなんとなく周りを見ると垂れこめた雲は急を告げている。鋭い峰と丸い峰は先程のようではなく、簾を通して蓮の香りが新しい涼を送ってくれる。

【語釈】 ○雲脚―雲の垂れた状態。「雲脚飛銀綿」(韓愈詩)。○峰巒―「峰」は尖った峰。「巒」は円い峰。

次阿九臯春晚韻 阿九臯の春晚の韻に次す

單身落落幾人同 單身 落落 幾人か同じきならん
且喜與君心境通 且つ喜ぶ君と心境通ずるを
半世官情茶味外 半世の官情 茶味の外
滿胸豪氣墨痕中 滿胸の豪氣 墨痕の中
酒衫經歲留餘碧 酒と衫は歳を経て 余碧を留め
春樹有花看剩紅 春の樹に花ありて 剩紅を看る
送盡韶光還自好 韶光を送り尽くすは還た自ら好し
南窓曝背捕琵琶 南窓に背を曝して琵琶を捕えん
(琵琶乃琵琶蟲也、謂蟲、出山堂肆考 琵琶は乃ち琵琶蟲なり。蟲を謂う。山堂肆考に出づ)

【詩題】 阿九臯の「春晚」詩の韻に次韻しての作

【大意】 ひとり身の私は性質は寂しがり屋で、何人同じような人がいるようか。その様な私だが君とは心境が同じであることを喜ぶのだ。人生の半分はお役人で、茶の味とは無関係。胸に宿る豪気や墨痕の様も共通する。酒や肌着は歳を経ても碧色を留め、春の花はまだ赤味を残している。うらかな春の光の中で、南の窓辺で背を日に当てながら虱でも取るうか。(琵琶はつまり琵琶蟲である。虱の事をいう。『山堂肆考』に出ている。)

【語釈】 ○阿九臯―深田九臯。江戸時代、尾張(愛知県)の人。号は九臯。尾張藩儒。○落落―さみしいさま。○酒衫・餘碧―「酒衫」は、酒を飲む時の薄衣か。○韶光―うらかな春の光。○琵琶―注にもあるように「虱」をこの様に言う。なお、『山堂肆考』(明・彭大翼撰)では、以下のような記事になっている。「宋道君、北狩至五國城、衣上見虱、呼爲琵琶蟲、以其形類琵琶」(卷二二八)。

桂屋老人作芳山暎靄圖見贈賦謝

桂屋老人「芳山暎靄図」を作り贈らる。賦して謝す

花耶雲耶白空濛 花や雲や 白きこと空濛
春山欲暎花氣融 春山は暎ならんとして花氣融(とお)る
憶昔車駕南巡日 憶う昔 車駕 南巡の日を
芳野櫻雲護宸宮 芳野の桜雲 宸宮を護るを
桂翁墨戲寫此意 桂翁の墨戲 此の意を写し
携來雲烟爲我寄 雲烟を携え来りて 我がために寄す

満幅雲烟筆逼真 満幅の雲烟 筆 真に逼り
欲問南朝千古事 問はんとす 南朝千古の事を

暁靄猶帶御爐香 暁靄 猶お御爐の香を帯びるがごとく
何處曾留鴛鴦行 何れの處にか曾つて留まる 鴛鴦の行
閑窗午影翁且坐 閑窗の午影 翁は且(しばらく)く坐せ
一杯須烹櫻花湯 一杯須べからく烹るべし 桜花の湯を
(時余偶作櫻花醬、方熟、故及之。時に余偶たま桜花の醬を作る。方に熟す。故に之に及ぶ。)

【詩題】桂屋老人が「芳山暁靄図」を作成し贈られたのに詩を書いて感謝する(其の一)

【大意】花も雲もほんやりと白く、春の山は今明けようとして花の香りが溶けるかのようだ。昔、(天皇が)車で南巡されたことがあったが、芳野の桜が天皇の宮殿を守っていたのがしのばれる。

【語釈】○桂屋老人―不明。○芳山―吉野山のこと。○空濛―小雨や霧で空の薄暗いこと。○花氣―花の香り。「露裏千花氣」(宋之問詩)。

【詩題】桂屋老人が「芳山暁靄図」を作成し贈られたのに詩を書いて感謝する(其の二)

【大意】桂屋老人の墨戯は意図する所を描き、雲や靄を携えて私の為によこしてくれた。軸一杯に描かれた雲や靄は、その描き方が真に迫り、南朝の嘗ての事を問いかけている。

【語釈】○桂翁―桂屋老人を指すが、人物については不明。○南朝―吉野を中心とした後醍醐天皇に始まる吉野朝。四代五七年間。

【詩題】桂屋老人が「芳山暁靄図」を作成し贈られたのに詩を書いて感謝する(其の三)

【大意】夜明けの靄はなお香炉の香を帯び、一体どこに嘗ての鴛鴦の行を留めているのであろう。がらんとした午後の窓辺に老人(桂屋老人)は坐っているが、そこで一杯桜花の湯を煮ては如何。(この時、私はたまたま桜花のひしおを作っていた。丁度熟したのでこれに詠い及んだのだ)

【語釈】○桜花湯―注に有るように「桜花醬」を作っていたらしい。そこで「桜花」の「湯」を作ってみては、と述べたのである。

送別 送別

短髮感秋眠忽驚 短髮に秋を感じ 眠忽ち驚く
客中相送故人情 客中相い送る 故人の情
寒窗夜色燈花暗 寒窗 夜色 燈花暗く
半枕離愁蟲一聲 半枕の離愁 虫一声

【詩題】お別れにあたって

【大意】短い髪に秋を感じ、うとうととしてはっと目を覚ます。旅立つ人を送るのは、なじみである人の情。寒々とした窓辺で灯の火は暗く、枕辺で別れを愁うかのような虫の声。

【語釈】○燈花―燈の芯が燃えて花のようになること。吉兆の象徴。「暗」の中に希望を見出している。なお、「燈花」は唐以来の口語。○半枕―枕をいう。枕の半分を言う場合もある。

秋雨 秋の雨

枕上燈花落又生 枕上の灯花 落ち又た生ず
 木綿衾裡夜三更 木綿の衾裡 夜三更
 豈堪孤客情尤切 豈に堪えんや 孤客 情尤も切なるを
 聽斷山窗秋雨聲 聽斷す 山窗 秋雨の声

【詩題】 秋の雨に

【大意】 枕辺に置かれた燈の花が音もなく落ちたかと思うとまた花ができる。木綿でできた寝間着を着て気が付けばもう夜更けだ。ひとり気持ちは哀切さに堪えず、気が付くと山里の窓辺に叩きつける秋雨の音に聞き入っている自分がある。

【語釈】 ○燈花―前の「送別」詩の【語釈】参照。○三更―五更の一つ。午後十一時から午前一時ごろ。○聽斷―訴えを聞いて裁くこと。ここでは聞きながら処理すること。

丁未冬至寄懷某在江戸

丁未の冬至、懷いを某の江戸に在るに寄す

客舍風光足雪霜 客舎の風光 雪霜足る
 知君此際夢家郷 知る 君の此の際 家郷を夢みるを
 薰餘篆字聞爐氣 薰余の篆字 爐氣を聞き
 別後題名有墨香 別後の題名 墨香有り
 今日村醪僅潦倒 今日の村醪 僅かに潦倒
 多年文筆尚尋常 多年の文筆は尚お尋常

爲逢佳節思良友 佳節に逢うために良友を思う
 情緒長於一線長 情緒は一線の長よりも長し

【詩題】 丁未(二八四七)の冬、某氏が江戸にあるのに、私の思いを寄せた

【大意】 旅館の自然は雪や霜に溢れ、君が故郷を夢見ていることを知った。残った篆字に囲炉裏の気配を感じ、別れて後の詩の題名に墨の香りが立つ。今日の濁り酒は少しがっかりだが、長年の文筆はいつもの通り。良き日に出会う度に君のことを思うが、その思いは一筋の線よりも長いと思うのだ。

【語釈】 ○丁未―一八四七年(弘化四年)。○薰餘―「余薰」とも。いつまでも残っている香り。余香ともいう。○潦倒―蘊籍の状。期待外れ。「潦倒麤疎」(嵇康 絶交書)。○尋常―普通。平凡。「尋常一様窗前月」(杜未詩)。唐宋以来の口語。○佳節―目出度い日。嘉節。「每逢佳節倍思親」(王維詩)。

題西行望岳圖 西行望岳図に題す

剃却鬢鴉除俗縁 鬢鴉を剃却し 俗縁を除き
 胸間磊塊託歌篇 胸間は磊塊 歌篇に託す
 蓮峰雲氣看無厭 蓮峰 雲氣 見て厭うなく
 不筭銀猫爐上烟 算せず 銀猫 爐上の烟

【詩題】 「西行望岳図」に題して

【大意】 世俗の縁を切るのかのように黒い鬢を剃り落し、胸の内の悲

憤懣を歌篇に托す。富士山にかかる雲も厭うことなく、頼朝からもらった銀製の猫も門の外で遊んでいた子供にくれてやった、という話のように。爐の上に立ち上る煙と共に消えても構わない。

【語釈】○剃却―「却」は動詞の後について意味を強める。○磊塊―胸の内に積もった悲憤懣懣の気持ち。「晋阮籍胸中磊塊」(世説 任誕)。○蓮峰―富士の峰。山頂は八葉の蓮花に似ていることからそのように言う。○銀猫―銀製の猫。頼朝からもらった銀製の猫も西行にとっては子供にくれてやる物の一つであった。

己酉歳晚仁壽山莊遇崎庵画師次韻

己酉歳晚、仁壽山莊にて崎庵画師に遇い次韻す

舊識兼新識 旧識と新識と

詩論或画論 詩論或いは画論

山莊如此静 山莊は此の如く静かなるに

世路不堪喧 世路は喧しきに堪えず

紙尾留殘曆 紙尾に残曆を留め

厨頭餘一樽 厨頭に一樽を余す

相逢何太晚 相い逢うこと何ぞ太(はな)はだ晚きに

且勿促歸轅 且(しばら)く帰轅を促すことなかれ

【詩題】己酉(一八四九)の歳の暮「仁壽山莊」で崎庵画師に遇い次韻した詩

【大意】新旧の知識と、詩論や画論。彼が住む山莊はこのように静寂に包まれているが、世の中は何と騒がしいことか。曆の最後にはまだ

数日残り、台所には酒が一樽。出会うのが遅きに失するが、暫くは帰宅を急がさないでくれ。

【語釈】○崎庵画師―斎藤崎庵(一八〇三―一八八四)。但馬の人。詩・書・画を能くした。明治十七年没。八十一才。○兼―「兼ねる」ではなく「と」との並列の「と」。口語的な用法。○世路喧―題にもあるように此の詩は己酉(一八四九)の年、つまり嘉永二年の作。この頃の日本は英国船が浦賀に来て海防論が盛んになりつつあった時期である。恐らく此の事を指しているよう。○歸轅―「歸」は返す。もどる。「轅」は車のかし棒。ながえ。

除夜同橋本研斎守歳 除夜に橋本研斎と歳を守る

流光今夜歎峻嶮 流光の今夜 峻嶮を歎き

濁酒守年迎舊朋 濁酒年を守りて 旧朋を迎う

潦倒斯身嘗阻險 潦倒の斯の身 阻險を嘗(なむ)るも

浮靡世態見摸稜 浮靡世態 摸稜を見る

溪雲釀雪猶成雨 溪雲は雪を釀し猶お雨を成し

瓶水涵梅不結冰 瓶水は梅を涵(うる)おして氷を結ばず

話盡心中多少事 話尽き 心中多少の事

一爐寒火一青燈 一爐の寒火 一青燈

【詩題】除夜に橋本研斎と一緒に徹夜して

【大意】過ぎ去る月日の今夜、山の険しいことのためにため息をつき、濁り酒で除夜に徹夜をして旧友を迎えるのだ。老衰の此の身、嘗ては険しさをモノともせず登ったが、浮靡な世態を見るにつけ、あの蘇味道の

ように自分で決めることさえ出来ぬ。谷間の雲は雪を含み雨を連れてきたが、花瓶の梅は水をもたらつてまだ凍らない。話が尽きたが心の中には多くの言いたいことがある。周りには炬の消えかかった火と青白い灯だけ。

【語釈】○橋本研斎―不明。○峻嶒―山の高く険しい様。「峻嶒起青嶂」(沈約詩)。○守歳―大晦日に徹夜して眠らぬこと。除夜の徹夜。「士庶之家、圍爐團坐、達旦不寝、謂之守歳」(『東京夢華録』)。○潦倒―老衰のこと。○阻險―險阻に同じ。険しいこと。○浮靡―派手で不真面目なこと。○模稜―中国は唐代の蘇味道が宰相の時、事を決めるのに自分の信ずる所を言わず、席の稜を手でさすっていただけであった所から「稜を摸する」といった。摸稜とも言う。○多少―①多いか少ないか。②多い。③いかほど。ここは②の「多い」の意味。

夢遊芳野 夢に芳野に遊ぶ

酒顛花狂過半春 酒顛 花狂 半春を過ぎ
 醉後身在花邊眠 醉後 身は花辺に在りて眠る
 花神伴我駕空去 花神は我を伴ないて空に駕して去り
 定是華胥國裏天 定めて是れ 華胥國裏の天
 欲迷不迷墜不墜 迷わんとして迷わず 墜つるも墜ちず
 夢裏分明認芳野 夢裏 分明に芳野と認む
 雙屐踏花歩輕輕 双屐 花を踏みて歩歩軽く
 忽到藏王古廟下 忽ち到る 藏王 古廟の下

坐看一目花千株 坐して看れば一目花千株
 我是花耶花是我 我は是れ花か 花は是れ我か
 荒涼何處問帝陵 荒涼 何れの處か帝陵を問う
 古宮春深花空鎖 古宮は春深くして 花空しく鎖す

臣楠正成臣藤房 臣は楠正成 臣は藤房
 國將亡先喪元良 國將に亡びんとして先ず元良を喪う
 神靈寶鏡尋無跡 神靈宝鏡 尋ぬるも跡なし
 山中花木益悲傷 山中の花木 益々悲傷
 南朝五十都是夢 南朝 五十 都是是れ夢
 夢場人世共茫茫 夢場 人世は共に茫茫
 夢覺花邊酒亦覺 夢に覺(さ)め 花辺に酒亦た覺(さ)む
 落花滿身有餘香 落花の滿身 余香あり

【詩題】夢の中で吉野に遊んだ詩(其の一)

【大意】酒きちがいに花狂い。そのような状態で春も半ば過ぎた。酔った後、花の近くで眠る。花の神はわれを連れて空へと飛び立ち、着いた先は昼寝の国。

【語釈】○芳野―吉野山のこと。○顛―気がふれる。「癡」に同じ。○華胥國―中国の黄帝が昼寝の夢に遊んだという理想郷が華胥氏の国であったという故事に因み「昼寝・午睡」を言うようになった。

【詩題】夢の中で吉野に遊んだ詩(其の二)

【大意】迷うかと思つても迷わず、墜ちるかと思つても墜ちない。夢の中でここは吉野だとわかった。我が足は花を踏んで軽く、忽ち藏王

古堂廟のもとに着いた。

【語釈】○蔵王堂―吉野のシンボルである金峯山寺蔵王堂のこと。蔵王は仏の名。憤怒の相をなし右足を挙げ左手に三鈷を持つ。

【詩題】夢の中で吉野に遊んだ詩(其の三)

【大意】座ってみれば眼下に千株の桜。私が花なのか、それとも花が私なのか。荒れ果てても寂しい所で帝陵はどこかと聞けば、古宮は春たけなわだが空しく花に閉ざされている。

【語釈】○我是花、花是我―恐らく『莊子』の「不知周之夢爲胡蝶與、胡蝶之夢爲周與」(齊物論第二)を踏まえているのであろう。

【詩題】夢の中で吉野に遊んだ詩(其の四)

【大意】我は楠正成、我は藤房と名乗り、国が今まさに滅びんとする時、先ず甚だ良い家臣を失った。また、あの印章と鏡を尋ねる術もなく、山中の花木は痛み悲しむ。南朝の五十年は全て夢と消え去った。夢の中では、人と世は共に計り知れないものだ。花の傍で夢から覚めて酒からも醒めて、落花を身に纏った我は、花の香りに包まれている。【語釈】○藤房―「箕村藤房公章庵旧跡」詩を参照。○元良―大いに良いこと。「一人元良、萬邦以貞」(書經 太甲下)。○神璽・宝鏡―三種の神器の二つ。印章と鏡。○南朝五十一―吉野朝五十七年間を概数で言ったもの。

陰山莊用西臺夫人墓 陰山莊に西台夫人の墓を申う

(俗所稱艶夫人也。墓在姫路城北酒井村 俗に称する所の艶夫人なり。墓は姫路城の北、酒井村に在り)

訳注『研志堂詩鈔』選(二)(塩見邦彦)

浴後輕衫珠汗垂

浴後の輕衫 珠汗垂れ

翠雲繚鬢未畫眉

翠雲は鬢に縹(ま)とい 未だ眉を画かず

暫倚欄干去自遲

暫らく欄干に倚りて去るに自ら遅し

無頼春風掠面吹

無頼の春風 面を掠めて吹く

豈知奇禍起此時

豈に知らん 奇禍 此の時に起くるを

謾使老奸窺冰肌

謾(そぞろ)に老奸をして冰肌を窺はしむ

堅白從來不磷縮

堅白 從來 磷縮せず

一片貞節託歌詞

一片の貞節 歌詞に託す

時は皇紐解難維

時に是れ皇紐は解きて維(つな)ぎ難く

人事世情爛且糜

人事 世情 爛れ且つ糜(ただ)る

朝向南方暮北馳

朝に南方に向かい 暮に北に馳す

舍順歸逆災相隨

順を舍(す)て逆に歸し 災い相い隨う

富貴一朝不可期

富貴は一朝に期すべからず

天網雖疎固無私

天網疎と雖も 固より私なし

高定身喪國遂危

高定まり 身喪いて 國遂に危うし

反賊如此何足悲

反賊此の如きは 何ぞ悲しむに足らん

獨有夫人全初思

獨り夫人ありて初思を全くし

不似阿郎事貳疑

阿郎の貳疑に事(つか)うるに似ず

燒跡猶餘一堂碑

燒跡 猶お余す 一堂の碑

青苔空埋舊燕支

青苔 空しく埋む 旧燕支

(夫人自燼處世稱燒堂

夫人自ら燼く處、世は燒堂と称す)

【詩題】陰山莊に西台夫人の墓を申う詩(俗に所謂艶夫人である。墓は姫路城の北、酒井村にある)

【大意】入浴後の肌着から玉の様な汗がしたたり、翠の雲が鬢にまわり付き、まだ眉を引いていない。暫く欄干に寄りかかり自分からは去りがたく、やくざな春かぜが頬をかすめて吹く。どうして数奇な禍が自分の身に起こることを知り得よう。ゆくりなくも悪者に雪のような肌を盗み見されたのだ。節操を変えないことはもとより影響もうけず、自分の貞節を歌の言葉に託したのだ。時に大いなる紐は解いても繋ぐのはむづかしく、人事や世情も爛れるばかりである。朝、南方に向かうかと思えば、暮れには北へと駆ける。正義を捨て、逆賊に味方し、禍が付き随う有様だ。富貴というものは僅かの時間に完成すべきものではないし、自然の制裁は疎であるように見えて実はそこには「私」などというものはない。夫の塩冶高定は身まかり、国は結局危うくなるし、こんなひどい謀叛でもどうして悲しむことがあろうか。夫人は初志を貫徹しようとして、夫が二股で仕えようとすることには似ても似つかない。焼跡には現在も一つの碑が残っていて、青い苔がむなしく昔の顔料を埋めているかのようだ。(夫人が焼身自殺した所で、世間では「焼堂」と言っている。)

【語釈】○陰山荘―現姫路市豊富町にあった。○西台夫人―塩冶高定(忠臣蔵で有名)の妻。高師直の横恋慕により、夫は讒言され出雲に逃げる(後に戦死)が、妻子は陰山荘で自害した。『太平記』巻二十一参考。○無頼―無法な事をする。放蕩。○堅白―意思・節操を変えないこと(『論語』陽貨編参照)。○不磷緇―不磷磷。影響を受けても変化しないことを言う。○皇紐―皇統。○爛且靡―靡爛。ボロボロにただれること。○天網―天が悪人を捕へる為に張る網の意で天の法律、自然の制裁。(『老子』「天網恢恢、疎而不失」。○燕支―燕脂。臙脂。濃紅色の顔料。口語。

尼將軍 尼將軍

欲把菱花購後榮 菱の花を把りて後榮を購わんとす

深閨一夢是前程 深閨 一夢 是れ前程

骨肉佗年被咬盡 骨肉 佗年 咬尽せられ

不知家鼠有狼情 知らず 家鼠 狼情あり

(鎌倉氏叔姪皆爲北条氏所斃 鎌倉氏の叔姪、皆北条氏の斃(たお)す所となる)

【詩題】尼將軍について

【大意】菱の花(鏡)で夢を買って後の榮華を手に入れようとした。奥深い閨で夢を見たのはすばらしい未来。ところが後に骨肉相食む争いに入り、家の鼠が企みに富んでいたとは。(鎌倉氏の叔も姪も皆北条氏によって殺されることとなった。)

【語釈】○尼將軍―源頼朝の死後、尼でありながら権力をふるった北条政子の異名。転じて権力をふるう未亡人にも使う。○家鼠―子飼の家臣のことか。

荷錢 荷錢

何論銅臭流詩家 何ぞ論ぜん 銅臭は詩家を流(けが)さんと

買斷春場好物華 買断す 春場 好物の華

似向漣漪争淺緑 漣漪に向いて浅緑を争うに似たり

一池新葉未藏蛙 一池の新葉 未だ蛙を藏せず

【詩題】蓮の葉

【大意】銅銭というものの臭さが詩人を汚すなどどうして論じられよう。春になり、この錢（蓮の花）で素晴らしい果物を買ひ占めるとしよう。それは漣と新緑とが争うようなもので、池の新しい蓮の上に蛙がいないのと同じだ。

【語釈】○荷銭―生まれればかりの荷の葉をいう。其の形が錢に似ている所からかく言う。○銅臭―銅銭の臭気。金錢に囚われた人物の行為を卑しんで言う語。「崔烈以五百萬得司徒、問其子以外議何如、子曰、人嫌其銅臭耳」（十八史略）。

贈友人歸山 友人の山に帰るに贈る

決然長占一身閑 決然として長へに占めん 一身の閑

也結鷗盟鷺社班 也（ま）た結ぶ 鷗盟鷺社の班

今日人間何所羨 今日 人間 何の羨む所ぞ

琴書無恙舊青山 琴書恙なし旧青山

【詩題】友達が山に帰るのに贈った詩

【大意】きつぱりと決意して自身を閑な状況に置こうとする。また隠居して風流を楽しみ詩社のグループで活躍する。今日、この世で何を羨むことがあるか。琴書は元のままだし、昔ながらの山々ではないか。

【語釈】○也―「また」の意。唐・宋以来の口語。○鷗盟―隠居して風流を楽しむこと。○鷺社―サギのグループ。詩社のこと。○琴書―「琴」と「書物」。知識人のたしなみを言う。

訳注『研志堂詩鈔』選（二）（塩見邦彦）

庚申溪途上雜詠 庚申に溪の途上雜詠

（余寓播州志方、過此溪、月或數次、得詩數十首、今錄其六 余播州の志方に寓す。此の溪を過ぐるは月に或いは數次、詩數十首を得たり。今其の六を録す。）

春泥一路雨絲斜 春泥 一路 雨絲斜なり

籬落蕭蕭三兩家 籬落蕭蕭として三兩家

幾處韶光人不管 幾處の韶光 人管（おさ）めず

東風閑却野梅花 東風閑却す 野梅の花

煙裏燈光斷又生 煙裏の灯光 断ち又生ず

模糊醉眼不分明 模糊たる醉眼 分明ならず

柳陰昏黑迷前徑 柳陰の昏黑は前徑を迷わせ

激石春流瀾瀾聲 石に激して 春流瀾瀾（かくかく）の聲

蕭蕭村路雨初晴 蕭蕭たり村路 雨初めて晴れ

人斷溪山野雉鳴 人 溪山を断てば 野雉鳴く

兩岸青松無雜樹 兩岸の青松に雜樹なく

春風滿地蒲公英 春風 地に滿つ 蒲公英

薄暮歸來寄杖枝 薄暮 歸來 杖枝に寄る

紫嵐堆裏酒家籬 紫嵐 堆裏 酒家の籬

胡床一半分詩客 胡床 一半 詩客に分け

十里溪山煙雨時 十里の溪山 煙雨の時

駘蕩東風吹面輕 駘蕩たり東風 面を吹きて軽く

一村桃李弄朝晴 一村の桃李 朝の晴を弄ぶ

春光別闢新天地 春光は別に闢(ひらく)新天地

人踏香雲暖雪行 人は香雲暖雪を踏みて行く

依微樹影月將斜 依微たり樹影 月に斜ならんとし

風露瓊珊涼氣加 風露は瓊珊として 涼氣加わる

溪上待人人未到 溪上に人を待ても人未だ到らず

暫留吟杖叩村家 暫らく吟杖を留めて村家を叩かん

【詩題】庚申(一八六〇)の歳、谷川の道での雑詠(其の一) (私は播州の志方という所に宿泊していた。そしてこの溪谷を過ぎる事、月に数回であったが、詩数十首を作った。今その内の六首を記録しておく)

【大意】春の泥道を行くと糸のような横殴りの雨。まがきの向こうにひっそりと二・三軒の家並み。のどかな春光は人間とかかわりなく、春風が野梅に吹きつけている。

【語釈】○播州―兵庫県南部の別称。○籬落―まがき。「落」は囲いのこと。○蕭蕭―ひっそりと静かなさま。○韶光―春ののどかな景色。「韶光開令序」(唐太宗詩)。○東風―春風。○閑却―おざりにすること。打ち捨てておくこと。「却」は動詞の後に付き意味のない字。返却・滅却などの「却」と同じ口語的な用法。

【詩題】庚申(一八六〇)の歳、谷川の道での雑詠(其の二)

【大意】霽の中に灯の光が消えたかと思うとまた一つ灯る。ぼんやり

とした酔眼にはどうもはっきりしない。柳の木の陰は暗く、先に延びる道にも迷いそうだ。谷川では石にぶつかる春の水音が激しい。

【語釈】○模糊―ぼんやりとしている。唐・宋以来の口語。「平明山雪白模糊」(白居易詩)。○激石―「激」は激しいこと。「激石」は石に水が激しくぶつかること。○灑灑―水の激する声。「水灑灑循除鳴」(韓愈 藍田廳壁記)。

【詩題】庚申(一八六〇)の歳、谷川の道での雑詠(其の三)

【大意】ひっそりとした村の道で先ほどの雨も上がった。谷川や山と離れると、どこかで雉の鳴き声がする。兩岸の青い松の林には雑樹とてなく、春風が地面一杯の蒲公英に吹いている。

【語釈】○蒲公英―キク科の多年草。漢方で開花前に収穫し、乾燥させたものを「蒲公英」ということから。

【詩題】庚申(一八六〇)の歳、谷川の道での雑詠(其の四)

【大意】夕暮れ時、つえに寄りかかるようにして帰宅する。一面の紫色に煙る夕陽の光の中に酒屋の籬が見える。床几の半分に私は座っているのだが、周りの谷川や山々は霧雨に煙っている。

【語釈】○薄暮―日暮れ。夕暮れ。唐・宋以来の口語。「今者薄暮、擧網得魚」(蘇軾 後赤壁賦)。○紫嵐―紫色に染まった嵐光。夕暮れ時の山に映ずる紫の光。○堆裏―堆積した中。○胡床―胡牀。胡国から伝えられたという腰掛。○煙雨―霧雨。細雨。「多少樓臺煙雨中」(杜牧詩)。

【詩題】庚申(一八六〇)の歳、谷川の道での雑詠(其の五)

【大意】 ゆったりと吹く東風（こちかぜ）が面を軽くなで、村の桃や李が朝の光の中できらきらと輝いている。春の日差しは別天地を開くかのように、私は香り立つ雲、温かい雪のような花びらを足元に踏みしめながら歩いていく。

【語釈】 ○駘蕩―春ののどかな様。「春物方駘蕩」（謝朓詩）。○香雲―雲のように立ち上った香の煙を言う。ここは「香りのよい雲」の意で使用しているのであろう。

【詩題】 庚申（一八六〇）の歳、谷川の道での雑詠（其の六）

【大意】 かすかに見える樹の影に、今、月が斜めに落ちかかろうとしている。風や露は衰え、代わりに涼しさがとってかわった。谷川のとおりで人を待っているが、待ち人は来ず、暫く杖をつきながら詩を吟じ村家の門を叩こう。

【語釈】 ○依微―かすかな様。ぼんやりした様。○珊瑚―珊瑚。盛り過ぎること。衰えること。唐・宋以来の口語。「詩情酒興漸珊瑚」（白居易詩）。

題古木竹石圖 古木竹石図に題す

直節與老幹 直節と老幹と
相對無賓主 相對するも賓と主となし
傍有雲根奴 傍に雲根奴あり
癡頑亦爲伍 癡頑亦た伍をなす

【詩題】 「古木竹石図」に題して

訳注 『研志堂詩鈔』選（二）（塩見邦彦）

【大意】 真直ぐな竹と年老いた木。お互いに相対しているがどちらが主人でどちらが賓客か。それらの傍には石があるが、石はかたくなな様で並んでいる。

【語釈】 ○雲根―石の異名。雲は山の岩石から生じるとされたところから、山の岩石をいう。「移石動雲根」（賈島詩）。「奴」は「しもべ」。竹や石の根元に「しもべ」のように控えている所から「奴」としたか。○癡頑―愚かでかたくななこと。「有錢不還債」（李商隱 李義山 雜纂 癡頑）。

寄家書 家書を寄す

十年客路尚遲留 十年の客路 尚お遅留
蓬鬢霜寒易感秋 蓬鬢霜寒 秋に感じ易し
自恐老親勞鬢黷 自ら恐る 老親鬢黷を勞し
郷書不敢寫蠅頭 郷書 敢て蠅頭にて寫（か）かず

【詩題】 家に手紙を出す

【大意】 十年の間家を離れ、尚お帰らずに留まっているが、蓬のよう伸び放題の鬢毛は秋を感じやすいものだ。年を取った両親には眼鏡を煩わせたくないので、故郷への手紙は小さな文字では書かないのだ。

【語釈】 ○遲留―遅れ留まること。○蓬鬢―蓬のような鬢毛。○鬢黷―雲が目を覆うこと。しかしここでは「眼鏡」のこと。中国に眼鏡をもたらした西域商人の名前に基づくという。○蠅頭―蠅の頭。細かいものに例える。「猶讀蠅頭細字書」（陸游詩）。

同西半山將登書寫山、宿刀出村、夜半有聲、疑雨、啓戸視之、風拂窗蕉、而月在峰頭、四顧寂然、情致頗適、剪燈書之

西半山と同(とも)に將に書写山に登らんとして、刀出村に宿す。夜半に声あり。雨かと疑い戸を啓き之を視れば、風、窗の蕉を払へり。而して月は峰頭に在り。四顧寂然たり。情致頗る適し、灯を剪りて之を書く

欲向名山理謝屐 名山に向いて謝屐を理(埋?)めんと欲す

半宵秋氣一星鉦 半宵の秋氣 一星の鉦

枕頭頻駭煙霞夢 枕頭 頻りに駭るかす 煙霞の夢

蕉葉戰風敲夜窓 蕉葉 風に戦(そよ)いで 夜の窓を敲く

【詩題】西半山と共に書写山に登ろうし、刀出村を出発しようとしたが、夜中に音がしたので雨かと疑って戸を開けて見てみると、風が芭蕉の葉に吹き当たっていた。しかし、月は峰の上にある。周りを見たが静かである。情趣がとてすばらしく灯の芯を切つてこの詩を書いた
【大意】この名山にかの謝靈運が履いたような下駄をはいで登ろうとする。夜半、秋の気配の中に小さな灯が瞬いている。枕辺でしきりと驚かされるのは山水の夢。芭蕉の葉が風にあおられてしきりに夜の窓を敲く。

【語釈】○謝屐―六朝時代の謝靈運(三八四―四三三)が下駄をはいで山に上る時は前歯を取り去り、下る時は後歯を取り去ったという故事。○半宵―半夜のこと。夜半。夜なか。○煙霞―山水。「臣所謂泉石膏肓、煙霞痼疾」(世説 言語下)。

登七草山 七草山に登る

模糊煙雨樹陰昏 模糊たる煙雨 樹陰昏
晚叩禪關問水源 晩に禪関を叩きて水源を問う
一路溪橋人不渡 一路の溪橋 人渡らず
霜楓滿地鹿蹄痕 霜楓 滿地 鹿蹄の痕

【詩題】七草山に登つた時の詩

【大意】靄に煙つてぼんやりとし樹の陰は暗く、夜遅くお寺の門を叩き水源を尋ねる。谷川にかかる橋には人つ子一人見えず、霜で赤く黄葉した落ち葉の上に鹿のひずめの迹が認められる。

【語釈】○七草山―播磨にある山の名。○模糊―ぼんやりしている。唐・宋以来の口語。○禪關―禪の関所、関門。そこから転じて禪寺。

自室津抵坂越船中 室津より坂越に抵る船中にて

扁舟載酒出津關 扁舟 酒を載せ 津関を出づ
海色晴開幾點山 海色晴開し 幾點山
赤城咫尺知何處 赤城咫尺 知らん 何れの處か
懊靄聲迷醉夢間 懊靄声に迷う 醉夢の間

【詩題】室津から坂越に至る舟の中で

【大意】一艘の小舟が酒樽を載せて室津を出たが、海の色はどこまでも青く波の向こうにいくつかの山が見える。赤穂城は近い距離のほずであるが、一体どこにあるのであろう。船頭が舟をこぐ声にさえあれ

これと迷い、一生をおえるかのようだ。

【語釈】○室津―兵庫県揖保郡御津町の地名。瀬戸内航路の寄港地。
○坂越―(さこし)。明石にあり。○扁舟―小舟。「扁舟泛湖海」(孟浩然詩)。○懊靄―「懊」は悩む。「靄」は雲気。しかしこは「懊靄」で船頭が舟をこぐ声を表すか。○醉夢―「醉生夢死」の略。何の為すこともなく一生を送ることをいう。「醉生夢死、不自閔也」(程子語録)。

題山中臥雪圖 山中臥雪図に題す

數莖蓬鬢亂鬢髻 數莖の蓬鬢 乱れること鬢髻
一臥溪山不出家 一たび溪山に臥して家を出ず
猶有吟情頻引夢 猶お吟情頻りに夢を引くあり
滿天風雪野梅花 滿天の風雪 野梅の花

【詩題】「山中臥雪図」に題して

【大意】数本の鬢のほつれ毛が乱れに乱れ、山河に引き籠もつてからは家を出ることもない。それでも猶お詩を吟ずる気持ちは消えそうもなく、周りには満天の風雪の中に野梅の花が咲いている。

【語釈】○鬢髻―髪 of 乱れる様。○野梅―野に咲く梅のこと。中国の唐詩には「野梅」を詠った詩はなく「野梅」が詠われる様になるのは、宋代以降である。多分唐代の首都・西安は梅が植えられるような環境ではなかったのかと思われるが、宋代は南方の汴(現在の開封)や臨安(現在の杭州)に都を置いたため、梅が家の庭にも植えられたのではないかと考えられる。当然、詩人たちは野梅を見る機会も増し

たであろう。

瓢 瓢

酒盡君倒 酒尽きて君倒れ
我醉亦眠 我酔いて亦眠る
花朝月夕 花の朝 月の夕
君我頹然 君と我 頹然たり

【詩題】瓢箪を詠む

【大意】酒瓶が空になつて君は倒れたが、私は酔つたので暫く眠るとしよう。花咲く朝と月の照る夕べ。君と私はすっかり酔っぱらっている。

【語釈】○頹然―酔つた様。「頹然就醉」(柳宗元 始得西山宴遊記)。

題松宇山人印譜 松宇山人の印譜に題す

金銀玉牙竹木 金銀 玉牙 竹木
鐵筆妙獨推君 鐵筆の妙 独り君を推す
篆體蝌斗鳥跡 篆体の蝌斗 鳥跡
刀法流水行雲 刀法は流水行雲なり

【詩題】松宇山人の印譜に題して

【大意】篆刻の材料には、金・銀・玉・象牙・竹・木があるが、君の鉄筆の運用は実に巧みで、君を印の第一人者として推薦する。篆字の

スタイルはおたまじゃくしや鳥の足の様な文字で、君の刀法は漂う雲や流れる水のように自由である。

【語釈】○松宇山人―不明。○蝌蚪―蝌蚪。オタマジャクシ。○鳥跡―蒼頡が鳥の足跡を見て初めて文字を作ったことを考えたという故事。文字の意味に使う。○流水行雲―「行雲流水」のこと。漂う雲と流れる水(『宋史』蘇軾傳参照)。

歳晩書事 歳晩 事を書く

青樽有酒可相娛 青樽に酒あり 相娛しむべし
遮莫年光恰似驅 遮莫(たと)え 年光は恰も驅るに似たるも
來事何須容易說 來事 何ぞ容易に説くを須(もち)いん
恐佗窮鬼定擲揄 恐らく佗(か)の窮鬼 定めて擲揄せん

【詩題】年末の事について

【大意】樽には酒がたっぷりとあり共に楽しもうではないか。例え歳月がまるで早馬のようにかけ去るにしてもだ。将来は簡単に予言することなどできることではなく、その様なことは、きつと貧乏神がからかうに違いない。

【語釈】○遮莫―たとえ・・・でも。唐・宋以来の口語。「遮莫」は昔から「サモアラバアレ」と読み「えい、ままよ」などと訳をつけるのは間違いである。○年光―歳月のこと。○來事―将来。未来のこと。【管子】参照のこと。○窮鬼―貧乏神。「三揖窮鬼而告之」(韓愈 送窮文)。○擲揄―からかう。「邪揄」とも表現する。

丁未歳旦 丁未の歳旦

一百八聲鐘杵傳 一百八の聲 鐘杵伝う
去年殘燭送餘寒 去年の殘燭 余寒を送る
東窓把筆閑磨墨 東窓に筆を把りて 閑かに墨を磨せば
自覺春光生紙端 自ら覺ゆ 春光の紙端に生ずるを

【詩題】丁未(一八四七)の元旦

【大意】除夜の鐘が一〇八つを打ち終ったが、今年の残り灯が寒さを余計に引き立てる。東の窓辺で筆を執り、静かに墨をすれば、春の光が紙の縁(へり)にも生ずるかのようだ。

【語釈】○鐘杵―鐘樓の鐘と鐘を打つ棒。○紙端―「端」は、「ふち。へり。」紙のへり。

蘭 蘭

托根幽谷裡 根を托す 幽谷の裡
亂竹惡荆多 亂竹 惡荆 多し
何似人海上 何ぞ似ん、人の海の上
不時有風波 時ならずして 風波あるに

【詩題】蘭について

【大意】幽谷に根を預けてはいるが、周りには乱竹やよこしまな茨が多い。それでも、人生の海で、不意に風波が起るのとは違う境地。

【語釈】○惡荆―よくない茨。○不時―不意のこと。

春雪留友 春雪に友を留む

風弄狂權簾影斜 風は狂權を弄し 簾影斜なり
模糊一白失山坡 模糊たり 一白 山坡を失う
春寒已負探梅約 春寒く已に負(そむ)く 探梅の約
留友林窓看雪華 友を留め 林窓に 雪華を看ん

【詩題】春の雪に友人を留めたとき

【大意】風は狂(きちが)いじみた様に簾の影をゆすり、雪が山並みを消さんばかりである。春とはいえまだ寒く探梅の約束はやぶることになつたが、友人を留めて窓辺で雪でも見てみよう。

【語釈】○山坡―やまの堤。山脈。○雪華―雪を花にたとえて言う。

榴火欲燃 榴火燃えんとす

黄梅時節雨如煙 黄梅の時節 雨 煙の如く
榴火煌々尚欲燃 榴火 煌煌として 尚お燃えんとす
若向車公窗外種 若し車公の 窓外に向(あ)りて種うれば
螢囊未必照陳篇 螢囊はいまだ必ずしも陳篇を照らさざるに

【詩題】ザク口の燃えるような赤色を見て

【大意】梅が熟す頃は雨が霽のように降る時でもある。ザク口の真っ赤な花は、まるで煌々と燃えているかのようだ。もしも、車胤の窓辺に植えていたならば、螢の入った袋は古い書物を照らさなくてもよ

かっただろうに。

【語釈】○榴火―ザク口の赤い色を火に例えて言う語。○向―「在」と同じ用法。○車公―車胤のこと。家が貧しかった為に灯火の代わりに螢を集めその光で勉強した故事。『晉書 車胤傳』参照。○陳篇―陳編とも。昔の古い書物のこと。韓愈『進學解』参照。

夏夜即事 夏の夜 即事

樹梢風死熱如煨 樹梢の風死し 熱きこと煨の如く
半夜蒸雲凝不開 半夜の蒸雲 凝として開かず
帳裏挑燈坐繡帙 帳裏 灯を挑(ひ)きて坐(そぞろ)に帙を繙き
翠乾坤外送蚊雷 翠乾坤の外に蚊雷を送らん

【詩題】夏の夜、感じた事を

【大意】木の梢に吹く風がパタリと止み、熱いことと言ったら火鉢の中の火の様だ。夜中になつてもムシムシした雲が動かずにじつといる。蚊帳の中で灯を引き寄せ、そぞろに書物の帙を開き、緑の天地のむこうに蚊のうなりを送ってやろう。

【語釈】○煨―「おき火」のこと。火鉢の中の火。○蒸雲―雲蒸のこと。湯気のようにムシムシした雲のこと。○帳裏―「とばり」の中。○帙―書物を保護するための覆い。○翠乾坤―「翠」は「みどり」。「乾坤」は「天地・宇宙」。ここでは蚊帳のことか。○蚊雷―蚊が集団で出すうなり。「潮聲遙聽訝蚊雷」(周必大詩)。

端午 端午

連朝雨色鴨煙消 朝に連なる雨色 鴨は煙と消え
 梔子花遅燕子凋 梔子の花遅く 燕子凋(しお)る
 新霽恰逢重五節 新たに霽れ 恰も逢う重五節
 一瓶榴火照寥寥 一瓶の榴火 照す寥寥と

【詩題】端午の節句

【大意】朝になっても続く雨模様に鴨たちは煙のように消え去り、クチナシの花は遅く、燕子(かきつばた)は元気がない。雨は晴れ、まるで端午の節句に合わせたかのように、一瓶のザクロの花があたりを静かに照らしている。

【語釈】○梔子―クチナシ。クチナシの実の場合もある。○燕子―ここでは「燕子花」(カキツバタ)のことか。「梔子」や「燕子」の「子」は名詞の後につける意味のない語。椅子・菓子・調子等。口語的な用法。○重五節―五月五日の節句。重午とも。○寥寥―さみしい。もの静か。

遊稱徳精舎 称徳精舎に遊ぶ

雨斷溪山緑漲空 雨は溪山を断ちて 緑 空に漲り
 疎簾捲盡夕陽紅 疎簾 捲き尽せば 夕陽 紅し
 人間有此清涼否 人間に此の清涼あるや否や
 亞字欄頭四面風 亜字の欄頭 四面の風

【詩題】称徳精舎に遊んだ時の詩

【大意】雨が谷や山を切断しているが、緑は空一杯に広がり、まばらな簾を捲き尽くすと、丁度夕陽が赤々と照っている。この世界にかような清涼はあるのだろうか。「亜」字をかたどった欄間に四方からの涼風が吹いてくる。

【語釈】○称徳精舎―現加古川市の称徳寺か。○夕陽―夕日。「夕陽無限好」(李商隱詩)。○人間―この世。世間。○欄頭―欄間のこと。「頭」は意味のない語。石頭。上頭。西頭。心頭等いづれも「石・上・西・心」の意。この様な現象は唐代以降、顕著となる口語的な用法。

夏日雜詠 夏日雜詠

一身潦倒醉生涯	一身 潦倒 醉生涯
自笑腰間傲骨奇	自ら笑う 腰間 傲骨奇なり
烏几残宵収燭淚	烏几 残宵 燭涙を収め
青衿半世誤心期	青衿の半世 心期を誤まる
拂窓新竹迎涼早	窓を払いて新竹は涼を迎えること早く
遮屋高梧得月遲	屋を遮る高梧は月を得ること遅し
誰識此中閑富貴	誰か識らん此の中の閑富貴
滿庭風露酒醒時	庭に滿つ風露 酒醒める時
悠々世事付天然	悠々たる世事 天然に付し
更覺此身心境全	更に覚ゆ 此の身 心境全し
時有時僧來叩戸	時に詩僧来りて戸を叩くあり
何妨啄木數驚眠	何ぞ妨(さまた)げん啄木数しば眠を驚ろかすを
石榴花濕紅紅雨	石榴花濕り 紅紅の雨

爐火香消細細煙 爐火の香消えて 細細の煙

浴後輕衫涼氣足 浴後の輕衫 涼氣足り

緑陰移榻讀殘編 緑陰に榻を移して残編を読まん

【詩題】 夏日の様々な事柄(其の一)

【大意】 この身は年を取り一生を酔って過ごしてきた。腰の周りは「傲骨」があり、人に屈しないのだと自ら笑っている。真っ黒な机に宵が明けようとしているが、灯の蠟燭のしたたりがまるで涙のようだ。青い衿元(書生)の半生を振りかえり、結局心に期した望みさえも誤らせた。窓を払うかの様に新しい竹は早くも涼しげに揺れているし、家屋を遮る高い桐の木で月を見ることが遅い。此(ここ)にこそ暇中に本当の豊かさがあることを誰が知っていたいようか。庭一杯の露や風に酔いが醒める時。

【語釈】 ○潦倒―「潦倒」と連用して、その音が「老」を表す所から「老衰」の義とする。老人らしい様。○傲骨―自らを高くして人に下らぬ意気と言う。唐の李白には「傲骨」があるので腰を曲げて身を屈することができないとした故事による。○青衿―青色の着物。古代の学生の服。書生を表す言葉。○此中―「ここ」の意。「此の中」ではない。「此中有真意」(陶淵明詩)。

【詩題】 夏日の様々な事柄(其の二)

【大意】 ゆつたりと流れる世の中の事はそのままにして、更にこの身と心の在り方を全きものになろう。或る時は詩僧が門を叩く時もあるが、キツツキが度々眠りを覚ますことも妨げと思わない。ザク口の赤い花は雨で湿り気をおび、囲炉裏の香も消えて細々と煙が立って

る。風呂上がりの軽やかな肌着は涼気をさらに増し、緑陰に長椅子を移して読みかけの書物でも読もう。

【語釈】 ○輕衫―軽い肌着。○榻―長椅子。

佐々木梶原騎絶菟水圖 佐々木梶原騎絶菟水圖

虬鬣霜蹄水拍鞍 虬鬣の霜蹄 水 鞍を拍ち

連鑣爭涉橘花灘 鑣を連ねて 争い渉る 橘花の灘

長流一躍波成雪 長流 一躍すれば 波 雪と成り

先見三軍膽氣寒 先ず見る 三軍 膽氣寒きを

【詩題】 「佐々木梶原騎絶菟水」図について

【大意】 みずちのような鬣(たてがみ)と駿馬のひずめで、水しぶきが鞍に打ち付け、鑣を連ねて先を争うかのように橘花灘を渡っていく。長流を一跳びすると波しぶきは雪のように散り、その先に見える全軍の大胆不敵な気力も消え失せるかのようだ。

【語釈】 ○虬鬣―みずちの様な鬣。○霜蹄―駿馬のひずめ。○鑣―くつわ。○橘花灘―橘の小島あたりの灘。梶原景季と佐々木高綱が先陣を争った場所として有名。○三軍―全軍。「三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也」(論語)。○膽氣―大胆不敵な気力。

秋郊所見 秋郊所見

山村秋冷雨絲絲 山村の秋冷やかに 雨絲絲

何處機聲隔竹籬 何れの処にか機声 竹籬を隔つ

一路濕雲人不见 一路の湿雲 人見えず
寒鴉占斷桔槔枝 寒鴉は占断す 桔槔の枝

【詩題】秋の郊外で見たままを

【大意】山村の秋は寒く、糸のような雨が降り続き、どこからか機織りの音が竹籬越えに聞こえてくる。見渡す限り湿った雲に覆われた道には人影もなく、冬の鴉がはねつるべの竿を独占している。

【語釈】○雨絲絲―雨が糸の様。小雨。「絲雨帶風斜」(周彦暉詩)。
○寒鴉―冬の鴉。寒がらす。○占斷―悉く占有すること。○桔槔―はねつるべ、水を汲む仕掛け。○枝―文字通りの「枝」ではなく「枝」に見立てたはねつるべの竿。

題雪景 雪の景に題す

天地開新界 天地は新界を開き
溪山夜雪時 溪山 夜雪の時
不勞剡曲棹 勞せず 剡曲の棹
十里一筇枝 十里 一筇の枝

【詩題】雪の風景に題して

【大意】雪の大地は新しい世界を見せてくれるが、それは谷や山が宵闇の雪に包まれる時だ。何の苦勞もせず、剡溪の曲がりくねった川をさかのぼるのは、十里の遠さも一つの杖で十分だ。

【語釈】○剡溪―浙江省曹娥江の上流。一名戴溪。王子猷が雪の夜、戴逵を尋ねた故事による(『世説新語』任誕篇)。○筇―四川省に産す

る竹。杖に適する所から「杖」の意味にも。

有馬山中尋楓 有馬山中に楓を尋ぬ

楓樹交枝夕日斜 楓樹 枝を交じえ 夕日斜なり
何邊昨駐牧之車 何れの邊にか 昨駐す 牧之の車
秋風狼藉尋無跡 秋風 狼藉にして 尋ぬるも跡なし
三尺墜紅埋屐牙 三尺の墜紅 屐牙を埋む

【詩題】有馬の山中に楓を尋ねて

【大意】楓の樹は枝を交え、その先にいま夕陽が落ちようとしているが、どこに昨日停めた車はあるのだろうか。秋風は無情にも取り散らかして、黄葉を尋ねる所とてなく、沢山の落ち葉が下駄を埋めてしまふのだ。

【語釈】○駐牧之車―駐めている杜牧之の車。○狼藉―「狼」は乱雑。「藉」は物事のごたつくこと。物事が取り散らかしてあること。○三尺―約一メートル。勿論、文学的表現である。○墜紅―楓の紅葉した落葉のこと。○屐牙―下駄の歯。

登摩耶山宿大乘院 摩耶山に登りて大乘院に宿る

晩宿摩耶第一峰 晩に宿る 摩耶第一の峰
上方斜日没殘紅 上方の斜日 殘紅を没す
松杉缺處天初豁 松杉の欠く處に天初めて豁け
阿淡攝泉蒼靄中 阿淡 攝泉 蒼靄の中

【詩題】摩耶山に登り大乘院に泊まつて

【大意】夕暮れ時、摩耶山の第一峰に宿を取った。山の上方は夕日が赤々と輝いて没しはじめている。松や杉の樹がない所に天空が開け、阿波や淡路島・攝津や泉州は青い靄の中にかすんでいる。

【語釈】○摩耶山―六甲山地の前山をなす孤峰。中腹に佛母摩耶山切利天上寺がある。○阿淡―「阿」は阿波(現在の徳島県)、「淡」は淡州(淡路島)。○攝泉―「攝」は攝州(大阪府の西北部と兵庫県の南東部)。「泉」は泉州・和泉國(泉北丘陵)のこと。

飲舞妓濱旗亭 舞妓浜の旗亭に飲む

青松白石路横斜 青松 白石 路 横斜

舞妓灣頭賣酒家 舞妓灣頭 酒を売る家

況有佳殺堪侷醉 況や佳殺の酔うを侷(すす)むるに堪うるあり

一盤新味海藤花 一盤の新味 海藤の花

(海藤花 鱧子鹽漬者、相傳梁田蛻崑翁所名 海藤の花は鱧子の塩漬けなるものなり。梁田蛻崑翁の名づく所と相い伝う。)

【詩題】舞子浜の料理屋で飲む

【大意】青々とした松と白い砂。道はななめに走り、舞妓浜のほとりに酒を売る店がある。まして良い肴があれば酔うのに十分である。盤上の新しい味はタコの塩漬(「海藤花」はタコの塩漬けである。梁田蛻崑翁が名前を付けたということだ)。

【語釈】○梁田蛻崑―江戸中期の儒者。江戸の人。加納侯、明石侯に

訳注『研志堂詩鈔』選(二)(塩見邦彦)

仕えた。磊落で慷慨の気象に富んだため「霸儒」と呼ばれたという(二六七―二七七)。「先哲叢談」卷之六に五条、蛻巖について触れている。○横斜―ななめ。はすかい。「疎影横斜水清淺」(林逋詩)。
○佳殺―佳肴のこと。良い肴。「美酒佳肴」。○海藤花―注にもあるように鱧子(タコ)の塩漬。

附録

訳注『研志堂詩鈔』選(二) 正誤表

頁數 上・下段行数 誤 ↓ 正
八九(192) 上段三行 誤(上平仄) ↓ 正(上平)
八九(192) 下段十八行 誤 鱸背時 ↓ 正 鱸背時
(書き下し文も)

九三(188) 上段表

誤 「古典韻文」中の誤字(「誌」) ↓ 正 「詩」字(但し、一段目

「曲」の前の「誌」は「詞」に)

九七(184) 上段八行

誤 之を承けて ↓ 正 承乏に

九七(184) 下段一行

誤 之を傾思すると ↓ 正 之に傾思すると

一〇四(177) 六行 誤 has ↓ 正 have

〔付記〕

本稿は、

科研費 基盤研究(C) 研究課題／領域番号19K00296

近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置 ―若槻克堂と

剪淞吟社の学際的研究 (期間 二〇一九～二〇二二年度 研究代

表者 要木純一)

及び、

島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究共同プロジェクト

近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置 ―若槻克堂と

剪淞吟社の学際的研究(課題番号 一九一三 期間 二〇一九～

二〇二二年度 研究代表者 要木純一)

による成果の一部である。

島根大学要木純一教授には多くのご教示をいただきました。この場
を借りて心より御礼申し上げます。

Kenshido's Selected Poems (2)

SHIOMI Kunihiko

(Professor Emeritus, Tottori University, Former Professor, Shimane University)

[Abstract]

Tekisho Shogaki a.k.a Kenshido (1818-1875) was a poet who lived through the last fifty years of Edo era and early Meiji era. He was Tottori han domain clan. His Poems were published in Bunkyo 1 year (1861). Kenshido poems have the characteristics of regional poetry and also the characteristics of the late Edo era.

Keywords: Tekisho Syogaki, latter term of Edo era, poem